



東北大学病院  
血液・免疫科  
Tel ; 022-  
717-7165  
Fax ; 022-  
717-7497  
2012年11月発行

## 巻頭言

少し遅れましたが、新号をお送りいたします。今回は8月から当科に入局していただいた城田祐子先生の紹介、日本血液学会の学会報告、毎年恒例の研修医向け血液免疫病セミナーのご案内、医師主導治験の紹介が主たる記事です。城田先生の加入により免疫グループの層が厚くなり、診療に多少の余裕ができてきた感がありますし、血液学会では演題数が増えただけでなく、科としての特徴も出てきた感があり、確実に教室の基盤ができてきたと思っています。私も先生方のご支援により日本血液学会の理事になることができ、また2014年は日本検査血液学会総会、日本鉄バイオサイエンス学会を主宰することになりました。今後も当科の発展に学内外の立場から尽くしていきたいと思いますが、さらに今後の教室の発展に重要なことは、血液免疫学を志す若手医師を増やすことでもあります。その活動として血液免疫病セミナーは極めて重要な行事であり、先生方におかれましては、このセミナーを盛り上げるために周囲の若手医師に参加の働きかけを是非ともお願いいたします。また、本年度2件の医師主導治験が厚生労働省の科学研究費に採択され実施の運びとなりました。一つは多発性骨髄腫に承認されているボルテゾミブを難治性SLEに適応拡大する医師主導治験で、もう一つは強皮症などの膠原病における難治性皮膚潰瘍に対する低出力体外衝撃波の医師主導治験です。難病に対して新たな治療法を開発するということは臨床の教室にとって重要なミッションであります。科として初めての医師主導治験であり、すべてのプロセスが手さぐり状態ですが、新しいことを楽しむという姿勢で進めて行きたいと思っています。この他、当科主導の臨床試験も複数進行中で、今後患者さんのリクルートをお願いすることがあるかと思いますが、その際にはよろしくご協力の程、お願い申し上げます。

記；張替秀郎

# 壺 秋保セミナー



研修の合間のブレイクタイム  
ためになる小話、揃っています

## 血液免疫病学セミナー 2012

2012年11月17(土), 18日(日)

場所：ホテルニュー水戸屋  
宮城県仙台市太白区秋保温泉元字榮前102  
TEL: 022-398-2301

参加費（宿泊料込み）：2000円

主催：東北血液免疫研究会  
共催：共益財団法人READ血液アカデミー  
お問い合わせ：東北大学病院 血液・免疫科 藤井博司

◆TEL:022-7171-7165 ◆E-mail:hfuji@med.tohoku.ac.jp ◆HP:http://www.rh.med.tohoku.ac.jp

来る11月17日（土）に、恒例の「血液免疫病学セミナー」を開催します。今年も昨年同様秋保温泉ホテルニュー水戸屋で行ないますのでよろしくお願ひします。

記；藤井博司



## 式 治験

今回、当科において当科主導の二つの医師主導臨床治験を行うことになりましたのでご報告いたします。

### 1 難治性SLEに対するボルテゾミブ療法

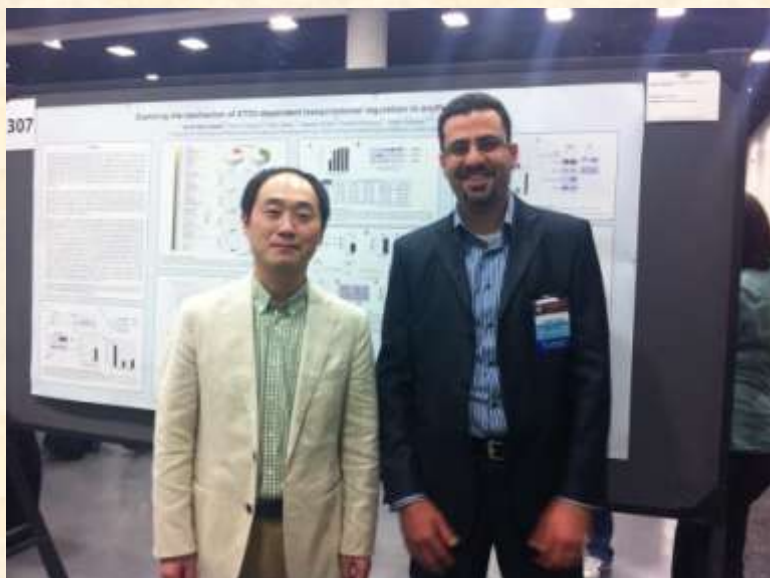
SLEの患者さんの予後は5年生存率は95%を超える報告が数多く出るほど良好になっていますが、これを20年生存率でみた場合には、70%台と現在でも大幅な生存率の低下を認めます。発症のピークが20～30代にあるSLEにとっては20年生存率も重要な評価項目となります。長期の生命予後が悪い因子の最大の原因はステロイド長期投与にともなう合併症とされています。またステロイド長期投与は生命予後のみならず骨粗鬆症の発生、脳や心血管でのイベントの発生、糖尿病など生活習慣病の発生など日常生活にも大きく影響します。今回の治験では免疫抑制剤使用にも関わらずステロイドホルモン剤をプレドニン換算で10mg未満に減量できない症例を難治性SLEと定義し、これら症例に対するボルテゾミブの効果をみる試験を産業医科大学、長崎大学と3施設の共同で行うことといたしました。この基準にあう症例数が少ない事もあり、各施設の先生がたには症例集めでご協力をいただく事になるかもしれませんがよろしく願いいたします。

### 2 強皮症にともなう指尖潰瘍に対する衝撃波療法

強皮症に冬場におこる指尖の潰瘍は、その治りにくさや痛み等のひどさから対応が大変難しい病変の一つで、膠原病専門医ならだれでも対処に困った経験をもっていると思います。一方衝撃波は結石破碎に頻用されていますが、出力を10分の1に絞ると、血管内皮細胞のVEGFを誘導し、血管新生が起こる事が知られており、現在当院循環器科にて重症狭心症患者さんに対して高度医療で提供されています。この医師主導治験は、この強皮症に対する潰瘍の病態に衝撃波を当てることで血管新生を誘導し潰瘍の改善、予防を図る治療に対する治験です。これを上記潰瘍に応用しようとする治験です。治験に合わせて潰瘍の自然歴を調べるレジストリーの構築も行う予定であり、こちらに関しましても各施設にご協力いただく事になると思いますのでよろしく願いいたします。

記；石井智徳

## 参 学位報告



藤原亨先生（左）と  
Alqadi Yarob Waelさん（右）

この度、パレスチナから 留学生として来日された Alqadi Yarob Waelさんが「Expression profiling of ETO2-regulated genes in erythroid cells（赤芽球におけるETO2制御下遺伝子群の同定）」の題にて学位取得となりました。

本テーマでは、赤血球分化に重要である転写因子GATA-1の相互作用因子として知られているETO2の標的遺伝子をゲノムワイドに明らかにしました。さらに、ETO2はグロビン遺伝子をはじめとした、多くの赤血球特異的遺伝子群の発現抑制に関わっているという知見を、臍帯血由来の造血幹細胞を用いた赤芽球分化系を用いて明らかにしました。困難な実験も多々ありましたが、常に前向きにチャレンジする姿勢には感銘を受けました。この経験が、何らかの形で役立って頂ければ幸いです。

私自身、大学院生の研究指導は初めての経験でしたが、色々のご指導を賜りました張替秀郎教授、また研究活動におきまして様々なサポートを頂きました血液免疫科の皆様から感謝申し上げます。

記：藤原亨

## 四 第74回日本血液学会学術総会

去る10月19日（金）-21日（日）、京都において第74回日本血液学会学術集会が開かれました。当科からは基礎2題、臨床6題の発表を行いましたのでご報告いたします。

### <一日目>

- 1 Expression profiling for discovering the role of LIM domain only 2 (LMO2) in erythroid cells :Tohru Fujiwara et al
- 2 Regulation of erythropoiesis by histone methyltransferase EZH2 inhibitor 3 deazaneplanocin A (DZNep) : Haruka Saito et al
- 3 Allogeneic HSCT in adult patients with EBV-associated T/NK-cell LPD, ENKL, and ANKL : Yasushi Onishi et al
- 4 Composite 5q- syndrome and acute lymphoblastic leukemia :keiichi Ohashi et al
- 5 Induction of thymic stromal lymphopoietin in mesenchymal stem cell by interaction with myeloma cell :Shinji Nakajima et al
- 6 Successful treatment for MDS developed from MonoMAC syndrome with GATA2 mutation by RIST :Koichi Onodera et al

### <三日目>

- 7 Phase II trial of bortezomib based regimen for refractory multiple myeloma-TOMATO study- :Yuna Katsuoka et al
- 8 A clinicopathological analysis of extranodal NK/T-cell lymphoma in younger adults: MIYAGI study :Noriko Fukuhara et al



## 五 医局員紹介

新しく入局した城田祐子先生です。



私は、この8月に入局させていただきました。私は、自治医大にて初期研修後、リウマチ膠原病科に所属して診療、研究に携わりました。結婚を期に東北大学第二内科へ入局させていただき、Lupus腎炎等、腎疾患へ興味がありましたので腎グループでお世話になりました。その後、2回渡米して約8年間National Institutes of Healthにて、全身性エリテマトーデス、Sjogren症候

群や、腫瘍免疫について研究させていただきました。出産や、子育てをしながらの研究生活でした。研究者としては、十分ではなかったと思いますが、子供達を通じて、地域のいろいろな方々との繋がりも多々あり、とても貴重な経験をさせていただいたと思います。1度目の留学から帰国後は、2007年から2009年まで当科免疫外来を担当させていただきましたことを心よりお礼申し上げます。膠原病は近年、生物学的製剤や免疫抑制剤の種類も多くなり、診療の面でも、研究の面でもとても興味深い分野です。医師になって、これまで膠原病に関わる仕事に携わっていた期間が長く、これまでの経験を、今後に少しでも生かせたらと思ひまして、この度入局させていただきました。まだまだ未熟ではありますが、これからもご指導下さいますよう、どうぞよろしくお願ひいたします。

